

子規俳句潺潺 4

— 明治二十九年

宮坂敏夫

道々や雫したる菖売(あやめうり)

明治29年

『寒山落木』卷五所収。夏、菖売に出る。初出は、二十九年（一八九六）夏、子規庵での運座稿と推定される。菖蒲茸あやめは十六句、菖蒲湯しょうぶゆは十二句と作っているが、菖売の句はこの一句のみ。歳時記にも菖売を季語として一項目立てているのは、『俳諧歳時記』夏之部（改造社・昭和8年刊）と、その解説を踏襲したと思われる『図説俳句大歳時記』夏（角川書店・昭和39年刊）くらいのもので、きわめて少ない。前者には、菖売につき「端午前となれば、菖蒲を引きて市中に売りに出づるものあり」と説く。菖あやめはしょうぶのことで、涙あやめや花菖蒲とは違う。

菖蒲 <small>あやめ</small> 売茸 <small>ゆ</small> いてまでゆく庵かな	千代女
長々と腋 <small>わき</small> にかけたたり菖売	白雄
菖蒲 <small>あやめ</small> 売赤脚 <small>あかあし</small> にして歩きけり	松瀬青々
湯の町のこの朝 <small>あさ</small> にきて菖蒲 <small>あやめ</small> 売	森澄雄

例句も少なく、手元の歳時記からわずかに右の句を拾い上げるこ

とができた。

ところが、『分類俳句全集』（第四巻）には菖蒲あやめの例句が二百二十五句と膨大な数があがっている。他に、むら菖、軒あやめ、切菖蒲、菖刈、菖蒲刀、あやめかつら、菖打、菖蒲帯、菖蒲鍵、菖蒲酒、菖蒲湯と菖蒲の傍題の季語があがり、菖売もある。そして、菖売の例句が二十句もあがっている。菖売は近年見かけないが、江戸時代には、端午の節句の前触れとして親しいものであったのである。

なぜこれほど菖蒲に子規が執着したのかあきらかではない。子規にとり、菖蒲は好きな草の一つであったことはたしかだ。

菖売の例句中、表記に関し、菖売が五句、菖蒲売が十五句。子規は菖売の古風ではあるが簡勁な表記を好んでいる。

さて、掲出句、下十二音のみずみずしさはあざやかである。が、一句の眼目は、上五の「道々や」にあらう。上五がなければ、受けとりようによっては、菖蒲から雫がしたたるのではなく、菖売のからだからしたたるとも解しかねない。平凡なことばのようでありながら、上五は生きて使われている。刈ったばかりの菖蒲の雫をした

たらせながら売りに来る菖売は、なんともすがすがしい。

### 夏嵐机上の白紙飛び尽す

明治29年

『寒山落木』巻五所収。夏、夏嵐に出る。『獺祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏にも採られている。四辺の青葉をゆるがして吹く青嵐あおらしという季語は、連歌の『梵燈庵袖下集』(至徳元)に「六月に吹く嵐を申すなり。発句によし」とみえ、以下俳諧歳時記『華実年浪草』(天明三)に「夏木立の梢の緑を吹きあらすをいふにや。一説、

六月土用中の空に、一点の雲なく青みたる天氣に、東風のかはりたるを、青東風あせごちといふ。無類の天氣なり。これを青嵐といふと云々」とある。青嵐と同じ内実をもつ夏嵐はきわめて新しい。夏の嵐という用法は『しら雄句集』(寛政五年成)に青あらしとして「かしは山夏の嵐をうち見たり」とあるが、夏嵐という語は見あたらない。掲出の子規の句によって、定着した季語であろう。

掲出句の夏嵐と青嵐との違いについて、『子規句集講義』(俳書堂・大正五年刊)での指摘が参考になる。

「薰風若しくは青嵐といふ、晴れ渡つたすがすがしいと言ふよりも、風が吹いて来る心持の方が強いのであらう。薰風とか青嵐といふのは勢力が中に籠つてゐて、そこに大きな夏の威力といふやうなものものが著しく感じられるのであるが、この夏嵐と言ふのは、勢力が外に現はれて居つて、寧ろ涼しい夏の風の吹いて居る心持を言つた

のであらう。」(高浜虚子)という一説に対し、「私の感じでは青嵐と夏嵐とはさう相違が無いが、それが青嵐といふと、文字の青白あおしろといふやうな態とめいたものになるから、もつと意味を局限しない夏嵐の方が穏かである」(山崎楽堂)といっている。

青嵐よりも夏嵐という用い方に、より簡潔な直截さが出ていよう。兩人の指摘もその点をいっている。掲出句の情景、一読して明瞭であるが、「飛び尽す」という下五に時間の経過を読みとるか否かという点で、微妙に鑑賞はわかれる。

虚子は前者の立場から、次のようにいう。

「この白紙は決して紙数が少ないのでなくして堆く積み重ねられた白紙であつて、其白紙が一度の嵐に飛んで了ふといふやうな烈しい分野のやうな風を言つたのではなくつて、涼しげな心持の好い風が吹くに從つて、机上の白紙が或時は二三枚飛び或時は十枚二十枚と飛んでゐるうちに、いつの間にか机上の白紙が飛び尽して了ふといふ、そこに夏嵐の心持が現はれてゐると思ふのである。殊に飛び尽すと言ふ語は一度に飛んで了つたよりも、或時間を経過して飛んで了つた場合に適當な語であると考えるのである。」

(先掲『子規句集講義』以下の引用も同書)

これに対し、吉野左衛門は、「時間を長く見るは夏嵐を使つたのと性質に於て一致しない。一枚飛び二枚飛び、さうしてだんだんに飛び尽すといふやうな事は事実に於て無い。一陣の嵐とした方が感じが強く且つ自然であると思ふ。」と、時間の経過を考える虚子説に

対し、一陣の嵐にばっと散ったと短時間のできごととみている。

右は「ホトトギス」発行所での大正四年（一九一五）八月一日の『子規句集』論講における発言であるが、同席した内藤鳴雪も左衛門説を支持し、「これは時間の長くない方に左袒する。風の吹く時に一枚二枚と続いて散った。それが嵐といふに善く適ふ。白紙といふが一の注意すべきところで、これが何か文字が書いてあつたといふよりも白紙であると言ふ事がこの場に最も適する。尽すと言つたところも夏嵐と適當する。（中略）其紙を押さへる暇もなくばらばらと散る様もどかしくも思ふし、又一種の涼しげに詠めもしたので、それが詩的趣味を構成してゐるかと思ふ。」といっている。

右の三人の開陳では、虚子説の場景設定がいかに大袈裟であり、ドラマティックに鑑賞しすぎる。それほど大仕掛けでない句を、気張って、深く穿ちすぎるといふ弊がある。

窓から吹き込んだ夏の強い風に、一瞬、机上の白紙がみんな飛んでしまったという句。病床にありながら、気力充実し、いささかの衰えも見えない子規の内面をあざやかに推測させるような句で、爽快感溢れた句である。

白田亜浪がゆきとどいた鑑賞をしているので紹介しておきたい。

「一つ時筆を擱いて、ごろりと横はつた刹那、颯と吹き入つた青嵐に、文鎮を忘れた机上の原稿紙がばらばらと飛んで、あなやと思ふ間に、吹き返した青嵐に煽られて、またもやばらばらと一枚残らず飛び尽して了つた。」（『評釈子規の名句』・資文堂書店・大正十五年刊）

### 月赤し雨乞踊見に行かん

明治29年

『寒山落木』巻五所収。夏、雨乞に出る。『春夏秋冬』夏之部（碧梧桐・虚子共編）雨乞にも入っている。新聞「日本」（明治31年8月31日）には、作句二年後に載せたもの。

早魃の象徴でもあるかのような赤い月を仰いで雨乞踊を見に行かんと思い立ったものであるが、一句を悲壯感にみちたものと解するか否かで両説がある。

『子規句集講義』大正四年九月十日「ホトトギス」発行所での論講、「補遺第七回」によると、長谷川零餘子は、一句の悲壯感を強調する前者の説、山崎楽堂と高浜虚子は悲壯感よりも、むしろ句柄がもつゆとりをみようとする後者の説とにわかれ、互いの意見を出し合っている。要は、「雨乞踊」をどのように考えるかという点と「見に行かん」という表現にこめられた作者の気持の解釈に關してである。

雨乞の悲壯な有様、「鉦をたゞき、火を盛んに焚いて、非常に大きな声を出して唄ひ踊る」（先掲書より以下引用）場景からの音を耳にして、居ても立ってもおられず思わず「淋しさに堪へられなくて出て行く」臨場感のある句とみる零餘子に対し、楽堂は、「早魃の雨乞であるから、随分真剣なものでありさうだが、案外さうでなく、打興してお祭騒ぎをする。（中略）早の為に沈滞してゐる人氣を引立

てる為、可也に賑かにやつたらしい。(中略)踊は面白さうであつて、それが『見に行かん』と言ふ興をそゝるだけの事になる」のだと「雨乞踊」への興を重視する見方を述べている。虚子は楽堂説をさらに強調する立場をとり、雨乞と雨乞踊とは違うもので、踊の方は、「目的は一生懸命でも、事実の上によとりが出来る。それを見に行かうと言ふ人には、それ以上にゆとりがあつて、其一生懸命の目的であるものを見物に行くと言ふ。それを楽しみに見に行くやうな感じがある。」と雨乞の悲壯感よりも、踊にゆとりを見出す面を重くみているのである。

右のような二説の見方について、たびたび引用する臼田亜浪は、両説を巧みに構成した折衷説とでもいうような卓説を提出する。

「早魃だといっても、直接の利害關係を持たない作者の客観的態度が、『見に行かん』といふ逸典的な言葉の奥にまざまざと窺はれる。ざりとて人としての祈雨の念願は、雨気もない月の赤さを憂ふる『月赤し』に現はれてもゐる。其の微妙な心理経過が一句の裡に躍動してゐる作者の手腕は讀ふべきではないか。〔評釈子規の名句〕  
亜浪は先の零餘子对楽堂、虚子の見方を知らないはずがなく、子規の写生に基づく態度と、しかもその底のあそびごころを掬い上げ、評価しているのは、二つの見方を理解したからであらう。

夏木立げんじゅうあん幻住庵はなかりけり

明治29年

『寒山落木』巻五所収。夏、夏木立に出る。『瀨祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏には表記が「無かりけり」とある。『春夏秋冬』夏之部(碧梧桐・虚子共編)夏木立にも採られている。後に新聞「日本」(明治35年6月27日)にも夏木立として載る。

幻住庵は、芭蕉の門人菅沼曲翠が伯父幻住老人が建てた草庵を師に提供したもの。芭蕉の『幻住庵記』の冒頭に、「石山の奥、岩間のうしろに山有り。国分山と云ふ。そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし。麓に細き流れを渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たせたまふ。」とある。大津市国分山の南麓を流れる三田川の小きな川を渡って、鳥居をくぐり三つの角を曲り二百歩ほどで、近津尾神社(八幡宮)の麓に着く。芭蕉は、おくのほそ道の旅の後、湖南地方や京都、伊賀に日を送り幻住庵に入ったのが元禄三年(一六九〇)四月六日。それから七月二十三日までここに滞在した。「終に無能無才にして此一筋につながら」と自己の漂泊の半生を記すことになる庵は、神社の境内のつづきの地であったが、いまは、「先たのむ椎の木も有り夏木立」を刻んだ碑と「幻住庵旧跡」としてした石碑があるのみ。芭蕉がよんだ椎の木は古い株が残り、傍に二代目の椎の太木がある。あたりは樹木がうっそうとして、眺望はきかない。

子規がここを訪れたのは、明治二十三年(一八九〇)八月二十九日。第一高等中学校を七月に卒え、九月に文科大学哲学科に入ることとなる。その学年末休暇中に、湖南をまわったもの。義仲寺で義

仲と芭蕉の塚、松縄手で兼平の塚、瀬田の長橋などを見て、石山寺へ来ている。そこから幻住庵を目指して、中途まで人力車に乗ったようであるが、それも捨て、後は歩いていく。石山寺から幻住庵趾までの道はかなりきつく、意志が強固でないと、途中で嫌になりにかぬ。

「石山より横に曲りて十町許り行けば国分村なり。路やうく」に細くなりて車の通るべくもあらず、独りあるきながら百姓に路を尋ねて山を登り行くに木立茂りて石燈籠路をはさむ。登り尽せばみやしろあり。其横に僅か三坪余りの土地ありて草のみおひたり。これこそ芭蕉の住みし幻住庵の跡なれ、椎の木ばかりは今も多くあり。むかしは知らず木立の茂れる為に眺望多からず。奉納の発句多し。まぼろしのいづこに住んで草の露」(しやくられの記(明治23年自筆稿))。

提出句をつくるのは、右の紀行から六年後になる。子規が幻住庵趾を訪れたのは、このときだけである。それほど感動がなくとも、ひと通りの回想句にはなるうが、子規は感動をこめてうたっている。六年前にはじめて訪ねたときの感動「これこそ芭蕉の住みし幻住庵の跡なれ」を、さらに増幅し、一句は、あたかも幻住庵そのものに出会えるかのような思いをいだいて訪ねたところが、庵はなかったというのである。当然、幻住庵という幻想をかき立てる庵名のおもしろさにもとづいた句であるが、実際に庵趾を訪れた実感としては、長い坂の道中、幻住庵はこの上にあるのではないかという

期待をいだかせるところがある。

あつさりした一句であるが、言外に思いが十分にこめられた佳吟であろう。

衣更へて愚庵を訪はん東山

明治29年

『寒山落木』巻五所収。夏、更衣に出る。新聞「日本」(明治29年6月27日)が初出。他に『新俳句』夏之部、更衣にも、表記「衣かへて」となっている。

愚庵は天田鉄眼(安政元?明治三七(一八五四—一九〇四)、京都、清水産寧坂に住む禅僧で、歌人。子規は明治二十五年(一八九二)十一月十二、十五日と両日訪ね、深更まで語り合っている。以来親交を結ぶことになる。

『松羅玉液』(新聞「日本」明治29年12月23日付)に愚庵と題し、先に訪ねたときの回想が載る。それによると、方丈の庵は絶壁に倚り、窓の下には谷を隔てて東山が手に取るが如し。同行の虚子も交え炉を囲み、茶を煎て服す。炉上にはある人の喜捨による浄林の作の釜がかかっている。菊桐の紋が一つ二つ鑄出してある名品で、子規はことにゆかしく感じた。愚庵は二十九年(一八九六)の春、東遊のついでに子規のもとを訪ねたもよう、そのときの印象と釜のこととをこう書いている。

「高き鼻長き眉、羅漢をうつしたらんが如き秀でたる容顔は昔に

も変らじと見しものから、東山の廬は常に吾が夢をはなれず。月の朝、しぐるゝ夕、ものにつけて思ひ出づるは彼の釜になん。」(同上)後に、釜の句が一句書かれている。

凧の淨林の釜恙なきや

掲出句のような、季語衣更てには、人を訪うとか会ったという類の発想が多い。たとえば掲出句の載る『新俳句』の前後にも、

衣がへして湯帝に見えんか 望雲

衣かへて門を出づれば人に逢ふ 紅緑

とある。子規自身も、同年の衣更の句に、

衣更へしところへ一人物もらひ

病中

人は皆衣など更へて来りけり

などとよんでいる。提出句の、そこはかとないおもしろさは、愚庵ということばによる。愚庵は禅僧なるがゆえに付けられた名であるうが、いかにも、いうならば素人ほい名である。自分の庵をへりくだつて称すときも用いられることは周知の通り。子規がひかれたのは愚庵の人柄であるが、一句は、衣更をしたさっぱりした気分、愚庵の、どこか禅僧らしからぬ軽さにひかれて風読めるのである。寒川鼠骨の鑑賞も、そこを突いている。

「夏になつて衣更をした、すか／＼しい身軽な善き心持となつた。其処で東山あたりでも散歩して、そこに住んでゐる兼て知り合ひの愚庵といふ坊さんでも尋ねて、世をはなれた話でもしやうかと

いふのである。更衣の心持と、禅坊主を尋ねる心持とが誠によく調和してゐる。のみならず其坊さんの名が愚庵で、其住居が東山といふので一層よき調和である。」(『夏季子規俳句評釈』・東京大学館・明治四十年刊)

愚庵に関する句は後にも触れる。

下闇や蛇を彫りたる蛇の塚

明治26年

『寒山落木』巻五所収。夏、木下闇に出る。『瀬祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏にも入る。

下闇は、夏の木立が鬱蒼と茂り、昼なお小暗いさまをいう。木下闇を略したもの。もとは『万葉集』などに、木の暗・木の晚、または木暮とか木の暗隠りという語があったが、かならずしも昼の暗さを指したものではなかった。俳諧式目書『御傘』(松永貞徳著・慶安四年刊)に夏の季語としてみえ、江戸初期の貞門俳諧の時代に、その本意が定着したもの。子規の『分類俳句全集』(第五巻)にも木下闇と同時に下闇の用例も多い。

下闇や鳩根性のふくれ声 其角

下闇や地虫ながらの蟬の声 嵐雪

下闇に乾かぬ閑迦の雫哉 蓼太

子規自身の句例は生涯に三十七句とそれほど頻用している季語ではなく、木下闇、下闇ともに用いている。

提出句は、子規の蛇に関する句として注目したい。蛇穴に入る（秋）とか蛇穴を出づ（春）あるいは蛇の衣（夏）といった句はあっても、蛇そのものを詠み、蛇を季語とした句は子規には一句もない。

たしかに江戸時代の俳諧作法書『糸屑いとくず』（轍士編・元禄七年成）にも、「穴を出づるは二月なり。衣をぬぐは五月なり。穴へ入るは八月」とあって、蛇そのものは雑とみている。少し下って『俳諧四季名寄』（蘭山編・天保年刊）、『俳諧歳時記栞草』（馬琴・青藍編・嘉永四年刊）になつてはじめて、三夏の季語として出される。

子規が『栞草』などを知らないはずはないが、蛇そのものを夏の季語として認知しなかったのである。

蛇を恐れ 蚯蚓をにくみ 蛭狩

明29

このような句をみると、子規の蛇嫌いをそこに忖度そんたくしてもよいかもしれない。蛇嫌いが高じて蛇を怖るる感性ができあがるのはごくしぜんなことだ。

掲出句と類同の蛇塚を詠んだ句が子規には二句ある。

蛇塚や何とも 知れぬ草の花

明27

蛇塚や蛇死して 蛇のから白し

明27

いずれも不気味な句であるが、その不気味さを見えるものとして具象化したのが掲出句で、季語下闇は、付きすぎるほど付き、不気味さを増幅する効果を出している。

『子規句集講義』大正五年（一九一六）二月二十六日「ホトトギ

ス」発行所での論議「補遺第十一回」で、目黒野鳥が的確な鑑賞をしている。「作者は暫時はちつと塚をながめて、或は蛇の由来なども想像して見て、此塚を建てた人の蛇に対する心持や或はこれを埋めて塚を建てる所までも、木下闇の人あしも疎いところに選んだことまでも思ひやつて、自分の物凄いと云ふ心持の極端から更に落着いて、此塚を或は怖れ或は珍らしがつて見つめてゐる時の、其心持が現はしてあると思ひます。」

さらに、蛇塚は空想なのか実地に見たものかという論になり、内藤鳴雪は松山城外の義安寺という寺にある少女の墓石（蛇が陰部に入り死去した云々）の話を紹介し、そこには蛇の絵が描いてあるという。子規はその墓を見たことがあり、着想はそこからと推測している。青木月斗は『子規名句評釈』（非凡閣・昭和十年刊）で、奥州二本松領塩田郡宮本にある蛇塚を話に出している。蛇塚のあり処はともかく、子規の陰惨な景色への趣向の一句として印象に残る。

うしろより月になりぬる 鵜舟哉

明治29年

『寒山落木』巻五所収。夏、鵜飼に出る。初出は二十九年（一九一六）六月六日の子規庵句会。同日は二回運座がもたれ、一回目は短夜、二回目が鵜飼であった。出席者は子規の他虚子、碧梧桐、紅緑、肋骨、月我。月我は吉田月我げつが、新潟県出身の東京法学院出の青年、この年五月、散歩の途次はじめて子規庵を訪問。子規の句会に

はこの日が初参加か。選句はしているものの、自句には一点も入っていない。他の顔触れは句会の常連。

十句出句中、掲出句には入点なし。点の入っている子規の句を掲げると、

たのみなく見ゆる鵜飼の白髪哉

鶴ツグやんで淋しく月の上りけり

顔の上に篝ふかるゝ鵜匠哉

鵜も鮎も鵜匠も後の闇路哉

鵜舟早し篝こぼるゝ水の上

右の「鵜舟早し」に虚、碧が入点。印象明瞭な句だからである。先の月我がはじめて子規から作句要領を教えられたのが「俳句は絵に書かれるやうに作れ」(吉田月我「子規先生を追想す」・ホトトギス第六巻第四号・子規追悼集・明治35・12)ということであった。理を最少限にし、場景を端的に印象つけた絵のような、お手本の句である。

掲出句、一見どこにおもしろみがあるのか作者の着想をさぐりたい句であるが、じつくりと味わうと佳吟である。

鵜飼は上代、鵜うかべ養部という專業の民が宮廷に仕えており、各国にあつても、各地の多くの川で行われていたことが『万葉集』の歌などからも知られるが、満月の前後は業を休んでいた。月明では篝火の効果がないのである。上弦の夜は月が沈んでから、下弦の夜は月が出る前に鵜舟が出た。

すると、掲出句の月は、下弦の月と読める。川下にすすむ鵜舟の背後から月があがる。鵜飼は大方終末に近づいている。舳先であやつる鵜うしよ匠も十二羽の鵜も、舟の中央部で四羽の鵜をつかう中なかつ鵜使も、さらに舳取や篝火をつくろう船頭もみんな疲れている。篝火も火勢がぐっと衰えていよう。観光のための鵜飼であつたならば、一夜の流れ舞台は、終幕といつたところ。

一句の、うしろより／つきになりぬる／うぶねかなのいずれの頭韻も母音u音が配され、そこにしつとりしたりズムが感じられる。

芭蕉の秀吟「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」の鵜舟も鵜飼が終わった末の哀歎をうたったものであるが、子規の鵜舟も同様の感慨を継承していよう。

なかなかの名句と思われるが、これは完全に子規の独創とはいえないふしがある。多分、子規が着想したときには意識になかつたであろうが、『分類俳句全集』(第四巻)、鵜舟(天文)に載る

うしろから月こそ出れうかひ舟 蓼 太

右の句の類想とみられてもしかたがない。

月代に追はれていそぐ鵜舟哉 梅 寄

月代やかへる鵜舟の怖き 寿 梁

同様の状況の鵜舟をよんでも、蓼太のうかひ舟、さらに子規の鵜舟の句の方には、悠々たる格調が感じられる。

夏川や中流にしてかへり見る 明治29年



『寒山落木』巻五所収。夏、夏川に出る。『獺祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏、『新俳句』夏之部にもそれぞれ入っている。加藤孫平（雪陽）宛書簡（明治29・7・8）に付記されているので、作句月日はそれ以前である。新聞「日本」所載「松蘿玉液」（明治29年8月24日）に「夏川」と題し、十句作ったことを回想する一文にみえる。蕪村の『新花摘』に感心し、同年初夏以来、蕪村にならい一題十句を試みたものである。『新花摘』は、一日に一題の下に十句程度の句が日記風に記されている。

虚子の「雑筆」（「ほととぎす」二巻6号）によると、子規が「牡丹十句」を作ったのはじまりで一題十句がはやり出し、句会の席でも連座一回おわると、後に一題十句を行うのが例になった。それは、従来の一題一句として数題作る連座では、限られた時間内に次から次へと異なる題をこなさなければならぬので、十分に想像力を駆使する余裕がなかった。それが一題十句となると、「一物の趣味を十の方面より見るなり、一皿の肉を十度味ふなり」（虚子・同上）ということになり、最初、浅薄で未熟、平凡な着想も、四句五句と詠みすすむうちに一題を深く新鮮に解するようになり、十句近くになると、想像尽し、言い尽して、ことばが自在にはたらく境にまでとどくようになる。虚子の表現をかりると、「座右にある古人の句などを散見しつつ、ふと某といふ語に逢著して忽ち又一新境を開き、茫茫たる原野際涯なきが如く、二三句はもとより五句七句更に立所に成るが如きを覚えん。」（同上）ということになる。

このような一題十句の試みは、「その題の趣味」が深く印象づけられて他日の句作をきわめて容易にするというのである。

掲出句の作句状況を調べるために同時に作られた十句中の五句を記す。

夏川を二つ渡りて 田神山

夏川や橋はあれど馬水を行く

夏川やわれ君を負ふて渡るべし

夏川を渡りつれたる小荷駄かな

夏川のあなたに友を訪ふ日かな

右の句は子規によると、昔夏期休暇に帰省中、武市某の村莊を訪ねようと、松窓松南の友人二人とつれだち、松山城下を二里ほどはなれた内川を渡った折のけしきを回想し、それより考えついた句が多いという。句中では掲出句が一頭抜いていよう。

掲出句は蕪村との関わりからすると、「夏河を越すうれしさよ手に草履」（蕪村句集）の夏河詠からの着想であろうが、蕪村の句が「前に細川のありて、滌潑と流れければ」と前書があるように、丹後の小川をうたっているのに対し、子規の夏川は、川中で振り返ってみたくさせる程の流れがある川だ。また、句調の面からも、清純な少年の快感を平明に詠い上げた句と、渡りかけた夏川への不安に立ちどまる実感に忠実な句との違いは大きい。一題十句の試みや句材は蕪村から、しかし一句の内実は、子規流の酒がかもし出されている。

中流は流れの中ほどの意。句意にむずかしいところは無いが、「かへり見る」という措辞から受けとる作者の心理を忖度そんたくすると微妙に二つに分かれる。

「半分は水の涼しさを思い、半分は流れの早さを氣遣ひつつも、腰まで裾を括りあげて、ざぶざぶ、ざぶざぶと徒渉しはじめた。流れは早いし気味のわるくないこともないが、涼しくていい氣持だ。……が、もうどのくらゐ越して来たであらうか……振り返って見ると、まだ半分に過ぎない、もう一息だ。」（白田亜浪『評釈子規の名句』）

「前へ進むべきか、後へ引返すべき乎、折角こゝ迄来て又引返すも残念ぢや、否引返すにも可なり骨が折れる、さゝ進んだ方が楽であるか引返す方が安全であるかと中流に立って思案してゐる体が「願ねがふ」の下五でよく現れてゐる。」（寒川風骨『春夏子規俳句評釈』）  
前者は、徒渉の不安をうちにもっているがともかく渡りきろうと、不安を比較的軽くみてるのに対し、後者は、「かへり見る」行為を重くみて、進むか引返すか二者択一の場とする。

いずれとも受けとれるが、子規の詠い口は夏川での一回の体験を、夏川ではあまねくだれもが経験することと、一般化して詠っていないだろうか。掲出句が一題十句の試みと知るならば、いっそう十句の中から、夏川の典型となるような句をという氣持がはたらいに違いない。すると、こゝは、夏川を渡る時にだれもがやる行為を軽く詠った句とみて、亜浪の解に賛同しておきたい。

### 美服びふくして牡丹ぼたんに媚こびる心あり

明治29年

『寒山落木』卷五所収。夏、牡丹に出る。『瀨祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏にも採られている。後に新聞「日本」（明治32年8月2日「牡丹」）にも掲載される。

子規の句にはめずらしく知的な理屈を詠った句。それだけに、「媚こびる心」の受けとり方によって句意もいささか分かれる。媚こびるを「妍けんを競ふことを誇る」意にとる前田普羅説『子規句集講義』大正五年四月三十日「ホトトギス」発行所での輪講、以下の説も同書）は、  
「美服して牡丹のそばに立つた時、自分の姿が牡丹の撩乱たる姿に調和して、疑いなく一幅の画図を成すであらうと一種の誇を感じた時の心持」を詠ったものと病身でありながらも「青春の力ある点」を誇りたいという子規のやるせなさをそこからくみとる。

それに対し、高浜虚子説は媚こびるを文字通り媚こびる意とみて、「なまじい美服などをする為に益々牡丹の下位に立って、賤しい心持を除く事が出来ない。さういふ人間は自然牡丹に媚こびる心持がある」と軽薄な美服のさまを否定したものとす。また内藤鳴雪説は、媚こびるを自分から嘲って戯れた意ととり、昔から文人はよく自らを嘲けることがあるが、掲出句も軽い戯れの句とみている。

普羅のように、「媚こびる心」に人間の本能的な性情を感じとる積極的な鑑賞と、虚子のように、そのような心を人間の賤しさとみ、

そこに牡丹を賞美する心持をみようとする見解、鳴雪のように、文人の余裕をそこに描き出したものとする見方など三人三様であるが、蕪村の牡丹に倣った一句としてみるならば、鳴雪説が注目されるよう。

## 夕風や白薔薇の花皆動く

明治29年

『寒山落木』巻五所収。夏、薔薇に出る。『類祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏にも採られている。「早稲田文学」(明治29年12月15日)に載るが、初出は、高浜清宛(明治29年5月20日)の書簡。佐藤紅緑が子規の俳家全集を写し、この人にしては不似合なほど勉強をしたのに対し、愛弟子の虚子、碧梧桐が子規の期待にそわない点をなげき、虚子を督励した手紙の掉尾に、「赤薔薇や萌黄の蜘蛛這ふて居る」と並べて出るもの。作句時期は書簡をしたためた直前あたりか。薔薇はその濃艶な美しさから、新しい季語と思われがちであるが、わが国への渡来は古く、『万葉集』にすでに詠まれている。「さうび」、「しようびのはな」と音読される。また「無波良」(『和漢三才図会』)とも。

子規は薔薇の句を生涯に四十九句詠んでいるが、明治二十五年(一八九二)に一句あるのみで、あとは二十九年以降。薔薇は、子規の後半生の好みの花。そのうち白薔薇を詠んだ作は、掲出句の他には二句。

白薔薇の花をつめたる棺かな

明29

赤薔薇と白薔薇と枝を交へけり

明33

清楚な白薔薇に関心をむけているが、格別白薔薇に思い入れが深いとも受けとれない。掲出句の白薔薇は、西洋薔薇ではなく、野茨のそれであろう。夕風を受けて、いっせいに動く軽さは白い茨の花がふさわしい。

たゞし、掲出句は、白薔薇の句というよりも夕風の涼味をうたった句であろう。上五音に夕風がくる句が、二十一句ある。「夕風に」が六句、「夕風の」が六句、「夕風や」が九句である。ちなみに「朝風や」は生涯に二句のみ。すると、やはり夕風に対して、特別な関心をいだいていたと思われる。

結核性のカリエスと診断され、春以来臥褥の状態の子規にとり、この年の夏の暑さは身にこたえていた。夕方の涼風が一日のしあわせをもたらす。なによりも待たれるものであろう。

黄昏の庭先、白い野茨の花がいっせいに動き、涼しい風が立つ、病人にとり、この一刻が一日の至福のときである。あっさり詠まれた、一見平凡な句であるが、子規の高揚した気持が十分に伝わってくる佳句といえる。

白田垂浪の鑑賞も夕風に着目し、的確である。「夕風」は此の一句の生命であり、また作者が詩的衝動の翼である。静止の状態にある夕闇の白薔薇は、唯だ夫れだけの相に過ぎない。それに活動の生命を付与したものは、此の一陣の「夕風」である。作者が端的に

「夕風」を劈頭に置いたのは味はふべき一点である。」(『評釈子規の名句』)

松井利彦はこの句をなした頃は、蕪村への関心が次第に内面的となり、蕪村俳句の「美的範疇への歩み寄りの時期」(『正岡子規・桜楓社』)だといっている。

同巧異曲に麻畑の一句がある。

夕暮やかならず麻の一嵐

明29

右の句は、夕暮の麻の一嵐に発見があるが、「かならず」に子規の知的な力みがあらわ。その点、夕風の掲出句には無理がなく、写真の眼も効いている。

また明治新事物ピアノを詠んだ薔薇の句、

薔薇深くびあの聞ゆる薄月夜

明29

『寒山落木』巻五の他に『新俳句』夏之部にも採られているが、二葉亭四迷の『めぐりあひ』に洋琴(ピアノ)などと訳されていた頃には、はやばやと句作にとり入れた新鮮さは評価される。

昼顔や安達太郎雨を催さず

明治29年

『寒山落木』巻五所収。夏、昼顔に出る。『頼祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏、『新俳句』夏之部にも入っている。「早稲田文学」(明治29年12月15日刊)に載る。

「安達太郎」はあだちたろうがフルネームであるが、こゝはあだ

たらと読んでよい。雲の峰、とりわけ入道雲の呼称は、それぞれの地方固有のいい方をもっている。関東の阪東太郎、関西の丹波太郎、九州の比古太郎、他に石見太郎、信濃太郎など。安達太郎は福島県中北部の休火山で一七〇〇メートル。安達太良山あたりに立つ雲の峰が安達太郎。

季語は昼顔。真夏の熱い日、みちのく福島の山脈にもくもくと安達太郎が出る。早天つゞきでうんざりの村人は、今日こそはと安達太郎に期待をもったが、一滴の雨ももたらさないで入道雲はくずれてしまったもの。あたり一面にはびこる炎昼の花、昼顔もさすがに精気が乏しくなっている。

昼顔の咲くや砂地の麦畑

明28

昼顔や砂に吸はるゝ昼の雨

明31

右の句のように、昼顔は日照りの大地を象徴する花。路傍の昼顔の近景と、安達太郎の遠景との呼応も見事である。「雨を催さず」と否定表現は、漢文口調を用いた男性的な力づよさがあり、その背後に日照りにともなうもろもろの被害や心配事を包括している。

「其の雄大なる景象は、放膽なる表現と相俟って、地方色が頗る濃厚に描き出されてある。」(白田亜浪『評釈子規の名句』)との指摘の通り、ゆたかな風土俳句である。

其中に楠高し青嵐

明治29年

『寒山落木』卷五所収。夏、青嵐に出る。後に「ほととぎす」

(明治30年5月発行)にもみえる。「其中に」とは、木が茂っている中の意。木立の中に楠くすのぎが高いとは、東国の景色ではない。関西以西の南国にみられる林相である。子規の青嵐を詠んだ同年の作、

住吉は松の中なり青嵐 明29

私は、右の住吉神社詠と、あるいは同時の作かと推測する。松に混って楠が繁る住吉は掲出句の場景にまことにふさわしい。子規の出色の作というのではないが、真夏の精気みなぎって光景を掴むには、作者の内面に、外の景色と呼応するだけの気力の充実がなければ、掴みきれぬものではない。力のこもった作である。

青芒三尺にして乱れけり 明治29年

『寒山落木』卷五所収。夏、青薄に出る。『獺祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年夏にも入っている。「早稲田文学」(明治30年3月1日刊)に載る。同年の青芒の作に、

古庭や一かたまりの青芒 明29

青芒七日の月に乱れけり

青芒葉末ばかりの乱れかな

右の句群と同時の作か、同時ではなくとも、庭前の同じ青芒をみての作であろう。三尺はわずかばかりの形容として子規がしばしば用いる表現で、子規草庵の広さを指したものに次のような作があ

る。

根岸草庵

三尺の庭に上野の落葉かな 明26

三尺の庭へ出て見つ星月夜 明29

三尺の庭を詠むる春日哉 明30

三尺の庭を掩ふや葡萄棚 明32

右の句群は、三尺の庭の措辞が子規の貧居自足の通称のように口をついて出たもので、庭の実態よりも、子規のわが草庵の庭に対する愛着の情がよく感じられる。

掲出句の三尺は、右の用い方とは異なる。三尺という長さに子規の確な把握がある。もちろん三尺といういい方自体、物差しで計ったものではない。朝ごとに伸びる芒のさまをわがこととして雀躍し、見つめていた子規が掴んだ長さが三尺なのである。「芒の持つて生まれた相」(白田亜浪『評釈子規の名句』)を把握したものである。亜浪の指摘はいい。

病臥の子規の限られた視野が、かえって青芒の生態をその本質において掴むことができたのである。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針

やはらかに春雨のふる 明33

三尺と二尺、青芒と薔薇の芽の違いであるが、それ以上に、俳句表現の完結性と短歌表現の過程性ともいうべき違いが、掲出句の青芒と右の薔薇の芽の短歌にあることを指摘できるように思われ

る。

けしの花とめどもなしにこぼれけり 明治29年

『寒山落木』卷五所収。夏、罌粟の花に出る。罌粟の花の作は子規に三十句、うち十五句が散るさまを詠んだもの。

開いても開いてもちるけしの花 明25

ちる時の見事也けり芥子の花 明26

芥子の花悟らぬ内に散りにけり 明27

芥子咲いて其日の風に散りにけり 明28

花芥子の開くや遅き散るや疾き 明28

散りさまを詠んだ例五句であるが、子規の攪み方はいずれも芥子の散るあわたゞしさに着眼している。けしの花は散り方にこそ、特徴があると子規は感じたものであろう。

掲出句も散り方のおもしろさに興じた作であるが、「とめどもなしに」という中七音の口語調の形容詞の用法に注目したい。これは古語にはない用い方で、明治期の口語。「饒舌り出しては止度なく」(二葉亭四迷『浮雲』明治20年刊)あたりが早い用例か。

けしの花の散り方をなけば擬人化し、なけば写實的に攪んだもので、口語調のやわらかな表現に、けしの花のもっともけしの花らしい本質が把握されている。花一字を除き、すべて仮名を用いたところにも、子規のゆきとどいた繊細な気配りが感じられる。

枯れ尽す葵の末や花一つ 明治29年

『寒山落木』卷五所収。夏、葵に出る。『額祭書屋俳句帖抄上』明治二十九年夏にも入っている。

や切れの句であるが、意味上からは、掲出句の「や」は「の」と置き換えても変りなく、一句一章の句といえよう。子規には、上五を「枯れ尽す」と冠せた句がある。

枯れ尽す菊の畠の霜柱 明28

枯れ尽す葎の底の小笹かな 明28

枯れ尽す糸爪の棚の氷柱哉 明35

右の句はいずれも「の」を多用した一句一章型の句であるが、句材の上からは二句一章型、取り合わせの句である。「枯れ尽す」という表現に執着した子規の氣負いが「の」を用い一句一章型の句にしたものか。

「枯れ尽す」とは、視覚に訴えた単なる写生の結果を指したことばではない。枯れるという目に見えるかぎりでの現象を超えた、一筋の觀念のつよさが感じられる。芯のあることばだ。

掲出句は、葵の花が本から咲きのぼり、咲いては実となって枯れ、ついに葵の天辺に花一つのみとなったというのである。「枯れ尽す葵の末」とは、見たまゝの把握であるが、そこには「枯れ尽す」までの真夏から晩夏にかけての時間が詠み込まれている。そ

れは、葵の咲きつづけた時間であるとともに、子規が溽暑の病床で闘病のうちに視界の葵と一体になってすごした時間である。それだけに、いま眼前にする天辺の「花一つ」は、あたかも自分自身のおかれていまする生を暗示するかのよう感じたのかもしれない。臼田亜浪の評もその点を指摘し、参考になる。「枯れ尽す」「葵の末」と層々畳々叙し来り、それを承けて魂を込めた「花一つ」は正に作者の相である。〔評釈子規の名句〕

「庭前」と前書のある「花葵上野の森は曇りけり」(明29)を実景と信ずれば、掲出句の葵の花も囑目吟とみてよいであろう。

### 山門をぎいと鎖すや秋の暮

明治29年

『寒山落木』卷五所収。秋、秋暮に出る。『瀬祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年秋、『春夏秋冬』秋之部(碧梧桐・虚子共編)秋暮にそれぞれ採られている。新聞「日本」(明治30年10月4日)が初出。

山門は寺院の正門に立つ楼門をいう。川添登(『都市空間の文化』I山並みの文化)によると、寺は平安京を守るために、山城盆地の周囲の山に建てられた比叡山延暦寺、高雄山神護寺、清水寺、鞍馬寺などのように、病魔をはじめさまざまな不幸の原因が都に入らないよう要害の役目をもったという。山号の由来も要害としての性格を暗示したもの。山門もまた同じ。

秋の日暮、寺の正門をぎいっと音をたてゝとぎす。静寂そのものの情趣をあざやかに掴み表現したものの。

三夕の歌「さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の夕暮」寂蓮、「心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮」西行、「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」定家(『新古今集』巻四)などから、秋の夕暮はさびしいもの、あわれなものとその本意が固定されるようになる。

子規は、秋の日暮の本意を、「ぎいと鎖す」と聴覚に訴える擬音で具体化した点が新鮮である。

### 長き夜や孔明死する三国志

明治29年

『寒山落木』卷五所収。秋、夜長に出る。『春夏秋冬』秋之部、夜長にも入る。新聞「日本」(明治32年9月24日)に載る。

孔明は蜀の名相、諸葛亮の字。三国志演義中でもっとも人気の高い人物である。蜀の劉備の三顧の礼に応えて、天下三分の計を進言した。呉の孫権と結んで、赤壁の戦いに魏の曹操を破り、いよいよ勇名を馳せ、先主劉備の死後はその子劉禪をたすけたが、魏の知将司馬懿(仲達)と五丈原に対陣中に病死する。孔明五十四歳。「星落つ秋風五丈原」(『三国志演義』)の詩句の通り、五丈原の蜀軍の空には、赤色の大星が墜ちたといわれる。

掲出句の要は、「孔明死する」にあるが、その点を高浜虚子は次

のようにいう。「今まで三国志に興を持って秋の夜毎々読耽って来た、其読者の心が、孔明の死んだといふことの為に一の気の衰へといふやうなものを感じる。そこを捉へたところが此句の生命をなして居る」(『子規句集講義』第一回)

右の「気の衰へ」とは「遂に孔明が死ぬところに達したと言ふ其時の安心したやうな、がっかりしたやうな心持」(同上書)ともいい換えている。また松井利彦は、「緊張し、息をつめて読み耽って来た物語の山をすぎた折の、心の変化を「孔明死する」という事柄を表面に出すことによつて表わした句」(『正岡子規』・桜楓社・昭和48年刊)といっている。

「孔明死する」とは、孔明が故地南陽の草廬を出、劉備に仕えて以来、孔明の行動に深く共感し、耽読してきた子規が、ひそかにもらした溜息。

「長き夜」は秋になり、めっきり夜が長くなったことをいう季語。こゝでは、子規が三国志を繙いた秋の夜毎をさすが、同時に「孔明死する」一夜の長さにも、長き夜はひびいていないことはない。建興十二年(二三四年)秋八月二十三日、孔明の死した五丈原の一夜は、まさに長き夜であった。

「長き夜」に関し、子規の心情を忖度した内藤鳴雪の鑑賞がある。

「最も秋と言へば悲しいといふのは常套で陳腐であるから子規居士はそこの趣味は持つてゐない。けれども病体であつて、夜長に倦

んだところからは、氣力も衰へてある感慨を起すところより、恰も三国志の孔明が死した頃などの氣力とそれが一致したので、遂に斯やうな句が出来たものと思はれる」(『子規句集講義』第一回)

鳴雪説は、上掲句から、夜長に倦んだ子規の感慨を主に受けとり、三国志の孔明の死がかもし出す氣分に共通するところをみるという、あたかも比喩的な読み方をしている。こゝは、上述の虚子、利彦二説のように、三国志の孔明への思入れを読みとるべきで、鳴雪説は、いささか迂遠ではないか。

子規の軍談好きは少年期からの嗜好であつたようで、「子規は斯うといふ英雄譚には興味を持ってゐた」(高浜虚子・『子規句解』・創元社・昭和21年刊)というが、この時期において軍談的世界を詠むのは、松井利彦の指摘の通り(『正岡子規集』日本近代文学大系16・角川書店刊・昭和47年刊)、蕪村の詠史に触発されたものであろう。

孔明に関しては、他に、「孔明賛」と前書がついた一句がある。

羽団扇に又孟獲を見る日かな

明29

これも三国志によつた詠史の句。孟獲は、孔明が捕えた南蛮の頭。捕えてはゆるし、ゆるしては捕え、七回に及び、ついに孟獲も孔明の寛大な人柄に服したという。掲出句は、羽団扇を持った孔明が捕えた孟獲を論じている場面との鳴雪の解(『子規句集講義』補遺第六回)がある。羽団扇を手にした孔明の態度に涼味を感じる句だといふのである。明治人たる子規の俠氣を読みとることができる句として、子規の見逃し得ない一面である。



長き夜を白髪が生える思ひあり

明治29年

『寒山落木』卷五所収。秋、夜長に出る。『瀨祭書屋俳句帖抄上巻』明治二十九年秋にも採られている。初出は新聞「日本」（明治29年2月9日）の「俳句二十四体」を論じた奇警体の例句として出されたもの。上五が「長き夜の」とある。句形としては、「思ひ」を強調する初出よりも、「長き夜」を実感たらしめる掲出句の表記が優れている。

奇警体とは、「めづらかに人の目をさますやうな意にして、あらぬ事があるが如く詠み、あるはさまでなき事を仰山に形容するたぐひ」（上場、新聞「日本」と子規自ら説くごとく句。すると、掲出句は奇警体の例句のために作られた句とも思われる。が、子規自身「白髪が生える思ひ」は、自らの病態を見つめる一点だけでもあり得たわけで、空想とのみいい得ない切実さがある。

満月となりて秋行く吉野かな

明治29年

『寒山落木』卷五所収。秋、行秋に出る。「俳句会稿」（『子規全集』第十五巻）によると、明治二十九年秋の子規庵での題詠行秋に出されたもの。日時不明。出席者は本人の他、虚子、碧梧桐、其村、蒼苔、繞石、鳴雪、楽天、肋骨。ただし、掲出句には入点が一

点もかかっていない。

掲出句は行秋の吉野詠。それも名高い花の吉野ではなく、月の吉野という場面設定。吉野は花ばかりでなく、月の名所でもあることを子規は知っていたものであろう。たとえば、『山家集』には、

をばすては信濃ならねど何処にも月澄

西行

信濃にある姨捨ではないが、こゝ吉野の姨捨も、姨捨はいずこにも月のうつくしい峰の名であることよという歌がある。吉野修験道の聖地大峰山の一峰伯母が峰をうたったもの。

吉野山中の仰ぐ者もない満月をうたい、行秋の感慨を托した子規の佳吟。想像の光景であっても、子規の志の一端を感じとれる句である。

受付日 一九八九年十月二十四日